

令和3年度玉名女子高等学校 学校評価

本校教育の目的

本校は、普通科・ビジネス科・食物科・看護学科の各教育課程を通して、それぞれの分野の基礎・基本はもとより、専門的・職業的知識や技能を修得し、急速に発展している国際化・情報化・高度化社会に遅れることなく、将来の日本が目指している男女共同参画社会に十分対応できる人材の育成を目的とする。

重点努力目標

1. 基礎学力充実のための取り組み 専門性習得のための指導力の強化
2. 基本的な生活習慣の確立を図るための取り組み（見えない学力の充実）
3. 文武両道
4. 人権・同和教育の推進
5. 働き方改革の推進

重点努力目標に対する自己評価総括

		評価項目	評価	総括
重点目標 1	1	教師指導力の向上	B	「わかりやすい授業の工夫」について教員の肯定的評価は昨年度より増加。生徒の肯定的な評価も7割に達しており、安定している。コロナ禍で感染対策をとるあまり、生徒からはグループワーク等、生徒参加型の授業を望む声が多くなっている。授業環境については、騒がしい授業や授業中の居眠り、質問できない雰囲気など生徒から指摘されている。生徒の反応、生徒の声を真摯に受け止め、さらに授業改善を図っていくための手段を検討していく。朝読書で集中力を高めることに対しては、生徒の評価は低く、教員は目的を明確にすると同時に取り組み方を見直していく。
	2	生徒の基礎学力の向上を図る	B	生徒の肯定感はこの4年間漸減している。昨年度評価が低かったマナトレについては、学年、学科ごとに教材を見直すなど改善を図ったが、教員の肯定的評価は3割と昨年度並みである。「朝読書等を通して、生徒が本を読むようになった」と感じている教員は13ポイント増加したが、マナトレ、朝読書の効果が「わからない」と答えた教員も2割程度いる。このような取り組みをなぜ行うのか教員が再確認し、それを生徒に伝えたり、取り組み方を見直すことで、効果的に行うことができるようになる必要がある。基礎力診断テスト等の外部テストについては分析を生かす。
	3	専門性習得のための指導力の強化	A	生徒の肯定的評価は毎年85%前後を維持しており、特に「そう思う」と答えた生徒が約49%と最も高い項目である。教員の評価も高く、昨年度の教育スローガン「科の個性を際立たせる」が達成できているともいえる。一方で、保護者の肯定感は低下している。コロナ禍で授業参観、文化祭等、学習成果を発表する機会がなかったことも一因として考えられるが、生徒の肯定的評価が漸減している資格取得・検定合格率などは、成果が表れるように努力を継続していく。
重点目標 2	4	基本的な生活習慣の確立と安全な生活指導	B	生徒の7割以上が、挨拶・整容面・掃除等について、きちんとできていると感じているが、指導の丁寧さについての肯定的評価は7割を切っている。また、心の悩みへの取り組みについて、生徒・保護者の肯定的評価は5割程度で、一昨年に比べ約10ポイント低下しており、「わからない」と答えた保護者も2割以上いる。一方で教職員の肯定的評価は高く、最も隔たりが大きい項目である。いずれも本校教育の要であり、丁寧な対応が求められるところである。信頼関係を構築するために日頃から生徒・保護者とのコミュニケーションを深めると同時に、教員が自身の言動を振り返り、さらに丁寧にかかわっていく必要がある。 コロナ感染症に対しては学校保健部を中心に、また寮でも対策を徹底することができ、校内での感染もなかったため、現在の取り組みを継続していく。施設の老朽化に伴う危険がないよう、安全点検を継続していく。
重点目標 3	5	進路指導を目指した指導	B	進路指導室の利用については教員、生徒ともに評価が低く、「わからない」と答えた生徒の割合が最も多い項目である。「進路だより」の発行や、LHRの時間等を利用し、積極的に進路指導室を活用させるよう取り組む必要がある。保護者の評価では「進路に関する面談」で評価を下げている。「キャリア教育」については「わからない」と答えた人がもっとも多い項目のひとつである。多様な生徒の進路希望を実現するための進路指導を実践するために、3年間を通じた進路指導計画の見直しと、保護者に対する情報発信の方法をさらに検討していく。
	6	文武両道を目指す学習と部活動の両立	B	昨年度に比べ、学校行事も部活動の大会等も、制限付きではあったが実施することができた。そのため、生徒の肯定的評価は上昇しているが、無観客が影響したためか、保護者の肯定的評価は下がっている。学習面の指導と同時に、今後も感染防止に配慮しながら、保護者への活動発表の場、生徒の活躍の場を提供できるようにし、進路保障を確立した文武両道を推進していく。

重点目標 4	7	人権同和教育の推進といじめを許さない心の涵養	C	いじめのない環境づくりについては、生徒の肯定的評価が漸増している。今後も継続していきたい。一方で、ハラスメントに配慮した教育では生徒・保護者の肯定感は低下している。まず、教員の人権感覚を高める研修の実施や、自身の、あるいは互いの言動を点検するようにし、人権に配慮した指導を徹底していく。 国際交流やボランティアについては、昨年度同様コロナ禍のため実施できず、今年度も評価を下げた。オンラインでオーストラリアの高校との交流を試行した。今後の取り組みに繋げていく。読書習慣も昨年同様最も評価の低い項目である。朝読書については教員の評価も低く、教員がその効果を理解したり図書館利用を意識して、日常的に働きかけられるような取り組みを検討していく。
重点目標 5	8	働き方改革の推進	B	休暇取得率の推進についての肯定的評価は上昇しているが、会議の見直し、校務分掌での仕事のスリム化については評価は下がっている。業務量軽減は難しく、昨年度から改善はなされていない。各部署での業務の見直しだけでなく、校務分掌や人員配置の在り方など、システムの見直しが必要である。ICTの導入とともに、業務のスリム化をめざしていく。
重点目標 6	9	魅力ある学校づくり	B	昨年度に比べ、制限付きではあったが学校行事を実施することができたためか、生徒の肯定的評価は上昇した。学校行事の重要性を感じるとともに、コロナ禍での行事の実施方法を検討し、満足度8割を目指したい。保護者の満足度、ホームページやメールでの情報発信に対する肯定的評価はいずれも8割と高い評価を得ているが、一方で全項目にわたり肯定的評価は下がっており、「わからない」と答えた人の割合が高くなっている。コロナ禍における、生徒の活動・活躍を発表する場や、教員と保護者が関わる場の持ち方の検討が必要である。女子校らしさについては、学校評価の結果を共有したり、SIの作成をとおして、各学年・学科・校務分掌の目標、年間計画等で具体的にしていく。